

【九州国立博物館】(計50件)

(1) 購入 (50件)

<絵画> (2件)

1 名称	列祖図冊 (れっそずさつ)	品 質	紙本著色
作 者 等	逸然性融筆	員 数	1帖
時 代	江戸時代・17世紀	寸 法 等	本紙：縦54.2cm 横40.1 cm 表装：縦62.0 cm 横45.7 cm
作品概要	釈迦、文殊、普賢、観音、勢至のほか、インドおよび中国の禪宗の祖師33名を加えた計38名の姿を描く。黄檗宗の開祖・隠元隆琦の序文と、その弟子・木庵性瑠による題賛および跋文が備わる。本作は、隠元の来日に尽力し、長崎・興福寺住持も務めた中国出身の逸然性融が、京都・萬福寺に伝わる陳賢筆「列祖図冊」を忠実に模写したものの。隠元は、本作が描かれた翌年、70人の祖師の事績と肖像画を集成した『仏祖像賛』を刊行しており、そこに収載された祖師像は本作および陳賢本とほぼ同図様を示すなど、強い影響関係がうかがわれる。本作は、黄檗における列祖図の決定版ともいえる『仏祖像賛』成立にも大きく関わる意義深い作例である。		
購入金額	10,800,000 円		



2 名称	長崎港図 (ながさきこうず)	品 質	紙本著色
作 者 等	川原慶賀筆	員 数	1面
時 代	江戸時代・天保11年(1840)-天保13年(1842)	寸 法 等	縦53.5 cm 横76.0 cm
作品概要	安政2年(1855)に來日したリンデン伯爵ヨハン・マウリッツ(1807-64)が所持した。本図には落款がないが、画面構成と構図の特徴から、川原慶賀筆だと考えられる。本図中に描かれるオランダ船は、1840年に長崎に來航したコルネリア・エンリエッテ号である。船長のベトルス・ブルーニング(?-1855)の注文に応じて慶賀が本図を描いたのであろう。慶賀は天保13年(1842)に追放処分を受けたことから、本図は船が來航した1840年から、慶賀が追放処分を受けた1842年までの成立である。ブルーニングが本国に持ち帰ったのち、1856年3月に帰国したリンデン伯爵が本図を入手した。本図は長らくオランダに所在していた慶賀筆の「長崎港図」で、本図の構図と共通する作例が少なく希少である。		
購入金額	10,800,000 円		



<書跡> (1件)

1 名称	東大寺関係文書 (とうだいじかんけいもんじょ)	品 質	紙本墨書
作 者 等		員 数	11通
時 代	平安時代-安土桃山時代・11世紀-16世紀	寸 法 等	(1) 東大寺政所返抄：縦25.9 cm 横22.7 cm (2) 東大寺牒案：縦28.5 cm 横45.0 cm (3) 官宣旨：縦30.3 cm 横42.0 cm (4) 尼蓮法敷地処分状：縦30.5 cm 横40.0 cm (5) 法印弁曉置文：縦32.6 cm 横54.0 cm (6) 観阿弥陀仏等家地配分状：縦29.7 cm 横45.6 cm (7) 威儀師実徹等寄進状：縦33.2 cm 横50.4 cm (8) 勝阿弥陀仏嫡男重光等水田処分状：縦28.3 cm 横43.1 cm (9) 円浄用途請取状：縦30.2 cm 横33.6 cm (10) 某書状：縦32.0 cm 横48.5 cm (11) 後陽成天皇諭旨：縦32.8 cm 横44.8 cm
作品概要	東大寺に関係する古文書11通。(1)~(4)は平安、(5)~(9)は鎌倉、(10)は南北朝、(11)は安土桃山時代。(1)~(3)は発給主体や受給が東大寺であり、他も関連文書や作成・受給者を「東大寺文書」や「東南院文書」に確認することができ、いずれも本来は東大寺に伝来した可能性が高い。全11通が新出あるいは原文書未確認の史料とみられる。内容は租税や土地に関するもののほか、(3)は東大寺宝蔵の黄金を開見せしむため、使の発遣を伝える。(5)は勝憲(勝賢)が醍醐寺に移出した観世音寺惣勘文6卷等の返納、紛失について、東大寺別当弁曉の置文。(7)は故寂蓮(橋正綱)子女が「摺写大般若經一部」と転読料を東大寺八幡宮に寄進する。(11)は穀屋祐乗上人御房に国家安全・宝祚長久の祈禱を命じる。		
購入金額	12,000,000 円		



<彫刻> (1件)

1 名称	如来坐像 (によらいざぞう)	品 質	木造漆箔
作 者 等		員 数	1軀
時 代	平安時代・12世紀	寸 法 等	像高137.0 cm 髪際高117.0 cm 膝張112.5 cm 膝奥89.0 cm
作品概要	半丈六の大きさをほこる如来坐像である。頭・体幹部は両耳後方を通る線で前後に矧ぐが、前面部は縦一材から彫成する。両手首先及び背面の大半は近代以降の後補となるが、前面部は当初部分をよく残す。また後頭部及び両脚部は同時期12世紀の別作例のものを矧ぎ付けるが、ほとんど違和感はない。大きくて丸い頭部、細長い目、短い鼻、小さな口で構成される穏やかな表情、充実した張りボリュームを示す胸部の肉体的表現、整然と流れる衣文表現など、平安時代後期木彫仏の特徴が顕著である。衣文の隆起はやや強く、自在に流れており、定朝様作品の浅く平行に整えられたものとは異なる作風がみられることから、制作時期は定朝様から展開した12世紀と考えられる。		
購入金額	252,720,000 円		



<金工> (1件)

1 名称	霰地真形釜欠風炉 (あられじしんなりがまかけふろ)	品 質	鉄製鑄造
作 者 等	芦屋	員 数	1口
時 代	室町時代・15世紀	寸 法 等	総高25.2 cm 羽径39.6 cm
作品概要	筑前芦屋 (現 福岡県遠賀郡芦屋町) で制作された霰地真形釜を風炉に改作したもの。後代に釜底が破れて底が付け替えられた後、風炉として底部に如意頭形の脚を3つ設け、更に胴の上部を意図的に打ち欠いた欠風炉(かまろ)の姿をとる。胴の付け根から伸びる羽は鑲羽(シロハ)で、羽先を玉縁状に仕上げる。太い真鍮鑲を通した左右の鑲付は大ぶり、喉や顎先が鋭つい鬼面をなし、大きく打ち返した鼻先や盛り上がった眉間や目と相まって、非常に雄勁である。鬼面の鑲付や胴部に巡らした羽からみて、制作当初は芦屋釜のなかで最も基本的な形である真形釜であったことは確実である。なお、肩あたりの割れ口で測る胴部断面の厚みは、最も薄い部分で2.3mmしかなく、大型の釜としては驚異的な薄さを誇る。		
購入金額	33,000,000 円		



<刀> (1件)

1 名称	刀 無銘則房 (かたな むめいのりふさ)	品 質	鑄造、庵棟
作 者 等	則房	員 数	1口
時 代	鎌倉時代・13世紀	寸 法 等	全長87.3 cm 刃長69.5 cm 茎長17.9 cm 鋒長3.3 cm 刀身反2.7 cm
作品概要	大摺上無銘ながらその傑出した作行から、備前国の福岡を拠点に作刀を行った一文字派の代表的刀工、則房の作と極められた刀。やや寸の詰まった猪首(イビ)風の中鋒。茎(なか)は大きく摺上げ、姿は現状中程で反る。鍛は空目に板目、肌立って地景入る。匂の上にごく微細な沸を振りまく。刃文は焼の高い逆足の入った重花丁子。物打付近には飛焼あり。鑄地あたりで乱映りが淡く立つ。帽子は乱れ込み、やや尖りごろころに小丸に返る。刀身彫物は、表裏とも棟側にごく僅かな縁が残る片チリの棒樋を茎尻まで掻き通す。本品に添えた纏は格調高い二重の金纏であり、三つ葉葵を精緻に透彫していることから、徳川將軍家ゆかりの一口として伝世したことを想定しうる。		
指 定	国宝		
購入金額	350,000,000 円		



<陶磁> (5件)

1 名称	染付丸文壺 (そめつけまるもんつぼ)	品 質	磁器
作 者 等	伊万里 (有田)	員 数	1口
時 代	江戸時代・17世紀前半	寸 法 等	口径9.4 cm 高台径8.4 cm 高22.5 cm
作品概要	初期伊万里の壺。全体にとろみのある釉薬がややまだらにかかり、高台には砂が付着している点など、典型的な初期伊万里の特徴を示す。一方で安定した器形や発色の良い呉須から、創始時よりも技術がやや進展した頃の製品と考えられる。本作品と類似する丸みのある壺で、1630-40年代の製品とされる作品が佐賀県立九州陶磁文化館に所蔵されており、本作品は同時期に作られた可能性が高い。		
購入金額	2,500,000 円		



2 名称	染付瓢形大瓶 (そめつけひさごがたたいへい)	品 質	磁器
作 者 等	伊万里 (有田)	員 数	1口
時 代	江戸時代・17世紀後半	寸 法 等	口径8.7 cm 高台径10.4 cm 高41.5 cm
作品概要	伊万里焼の染付の大瓶。染付磁器は草創期から江戸時代を通じて生産が続き、その間に様々な様式展開が見られた。特に、欧州輸出向けと国内市場向けと受容者の文化の違いに応じて、異なる様式展開がなされていった。本作品は、胴部にひまわりのような文様と頸部には芭蕉文が描かれ、非常にエキゾチックな印象を与える。高さも40cmを超える大型で、このような製品はヨーロッパ輸出向けとして、1660-70年代に製作されたもので、その中でも最上質の製品にあたる。		
購入金額	2,500,000 円		



3 名称	色絵草花文ケンディ (いろえそうかもんけんてい)	品 質	磁器
作 者 等	伊万里 (有田)	員 数	1口
時 代	江戸時代・17世紀後半	寸 法 等	口径5.0 cm 高台径9.8 cm 高22.0 cm
作品概要	ケンディは有田が輸出時代を迎えた頃に生産された水注で、kundicaというサンスクリット語で水差しを表す用語に由来し、元々はインドで用いられていたものが、マレーシアやインドネシア地方に伝わり、定着したと言われる。主に東南アジアで需要のあった製品である。持ち手がないのが特徴で、上部の口から液体を入れて、側面の注口から口に注いで使用するという。本作品は、初期の色絵に比べて、黄・緑・青を中心とする鮮やかな色調の上絵具が用いており、1670-90年代に作られた柿右衛門様式の前段階の色絵磁器にあたる。伊万里焼が東南アジアでも需要のあったことを示す貴重な作例である。		
購入金額	2,000,000 円		



4 名称	白釉緑褐彩壺 (はくゆうりょくかさいつぼ)	品 質	白釉緑褐彩陶
作 者 等	中国・四川省邛崃窯	員 数	1口
時 代	中国 唐-五代十国時代・9-10世紀	寸 法 等	最大径18.0 cm 高17.6 cm
作品概要	中国四川省の邛崃(キョライ)窯址では、唐時代から五代十国時代にかけて透明釉の下に絵付けされた陶器が盛んに作られた。白い化粧土の上で緑・黄色・褐色に発色する絵付けが唐三彩を髣髴とさせることから、「邛崃三彩」とも呼ばれる。しかし、透明釉の下に絵付けを施す工芸技法は唐三彩より、むしろ長沙窯との類似が指摘されている。本作は日本で稀有な邛崃三彩の好例である。白化粧を二重にかけ、その上に草木の絵付けを施す。絵付け後に黄色味を帯びた透明釉をさらにかける。高温で焼成され、素地は硬い。釉裏に施された絵付け、実用に耐える素地の硬さは、大部分が墓への副葬という非実用的な目的で作られた唐三彩と異なり、新しい時代の様相をたたえる。		
購入金額	3,088,800 円		



5 名称	白磁龍耳瓶（はくじりゅうじへい）	品 質	白釉陶
作 者 等	中国・華北	員 数	1口
時 代	中国 唐時代・7世紀	寸 法 等	幅27.0 cm 高52.3 cm
作品概要	平底で卵形の胴部に細くくびれた頸部がつき、左右に龍頭形の把手をともなう。龍は頭を垂れ、盤状の口縁部を咬んでいる。頭頂部には耳・角・鬘が精緻に表現されている。龍頭形の大ぶりの把手は実用に不向きであり、本作は墓に副葬するための明器として作られた可能性が高い。硬い素地の表面に白化粧を施し、口縁部から胴部にかけて青味を帯びた透明釉をかけている。龍耳瓶の器形は西アジアのアンフォラ形のガラス器に影響を受けて成立したと考えられる。三彩の例も多く知られているが、出土例の年代と龍の形態を見る限り、白釉・白磁の龍耳瓶のほうが早く、その時期は初唐に集中している。西域との交流が盛んだった唐代の国際色豊かな文化を象徴する器種のひとつである。		
購入金額	6,480,000 円		



<漆工> (1件)

1 名称	牡丹螺鈿長方盆（ぼたんらでんちようほうぼん）	品 質	木製漆塗
作 者 等		員 数	1枚
時 代	14-15世紀	寸 法 等	縦35.2 cm 横16.1 cm 高3.1 cm
作品概要	木製漆塗、長方形の盆で口縁と見込の周縁には、金属製の縁線をめぐらす。総体黒漆塗の地に鮑貝を用いた螺鈿の技法で、見込には大きな花を開かせた二輪の牡丹花を表わし、立ち上がりにはそれぞれ、両左右端を如意頭形とした窓枠を設けて、内部には牡丹、菊、梅などの花唐草文を配し、外部には六弁花入亀甲文を表わす。花卉や枝には発色を意識した貝の使い分けが認められ、花卉や枝にも細やかな毛彫りをほどこすなど細やかな表現を見せている。日本には、本品のような中国製の小形の盆が数多く伝来しており、形状、文様、技法ともにさまざまなバリエーションが認められるが、なかでも長方盆は、書院床で巻物を載せる盆として用いられた。		
購入金額	16,200,000 円		



<染織> (3件)

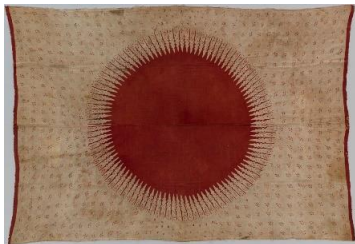
1 名称	白地立木文様更紗掛布（しろじたちきもんようさらさかけぬの）	品 質	木綿単糸平織、媒染模様染め（木版）・蠟防染模様染め（手描き）、片面染め
作 者 等	インド・コロマンデル海岸	員 数	1枚
時 代	18世紀	寸 法 等	縦204.5 cm 横133.5 cm
作品概要	イスラーム文様を表わす大判の更紗。中心区画はイスラーム建築の壁龕様の枠を設け、内側には山形の土坡を魚鱗葺に重ねた大地と、先端の尖った立木を表わす。立木の周囲の空間にも鋸歯状の多弁花と花唐草を充填し、立木を中心に獅子、孔雀、尾長鶏、鸚鵡、栗鼠などを左右対称に描き、上方にはアラビア文字を記した題箋を表わす。中心区画を囲む枠取り部分には曲線を描く唐草と大輪の花を配し、上部帯枠内中心には半裁形の太陽と剃髪で顎髭をたくわえた男性の顔を表わす。		
購入金額	4,752,000 円		



2 名称	縹地火焰形花卉文様更紗 (はなだじかえんけいかきもんようさらさ)	品 質	木綿単糸平織、媒染模様染め・蠟防染模様染め(木版、手描き)、片面染め
作者等	インド・コロマンデル海岸	員 数	1枚
時 代	18世紀-19世紀	寸 法 等	縦398.0 cm 横226.0 cm
作品概要	薄手の木綿生地を2幅縫い合わせた大判の更紗。縹地に火焰形花卉文を主文とし、周りに4弁の花弁文を菱繋ぎに連ねる。中央部の天地には先端が糸目状に伸びた火焰形花卉文を配した区画を端から茜、茶、黄色地の3段に表わし、蠟防染で白抜きされた細線(白糸目ともいう)で細かな文様をあらわした典型的な「暹羅手(シャマテ)」の更紗である。		
購入金額	5,000,000 円		



3 名称	白藍地花旭日文様更紗 (しろあいじはなきよくじつもんようさらさ)	品 質	木綿単糸平織、媒染模様染め・蠟防染模様染め(手描き)、両面染め
作者等	インド・コロマンデル海岸	員 数	1枚
時 代	18世紀(1760年代)	寸 法 等	縦203.2 cm 横265.0 cm
作品概要	木綿布2幅を縫い合わせた大判の布の中央に鮮やかな茜地の旭日文を染め抜き、その周辺は藍色の縄目模様を地模様にし、茜色の花模様を散らす。布の端一箇所に1760年代(一の位は判読不可)のVOCマークが捺印される。大型の布の中央に菱形や楕円形の無地や別文様の空間をつくる意匠構成は、ジャワ更紗の典型的様式のひとつでドドットと称される王侯貴族の婚礼用の腰布にみられるもので、本品はジャワやスマトラ向けに制作されたインド更紗であると考えられる。		
購入金額	3,500,000 円		



<考古> (34件)

1 名称	鉢形土器 (はちがたどき)	品 質	土製
作者等	伝福岡県久留米市荒木町出土	員 数	1点
時 代	縄文時代・1万年前-6000年前	寸 法 等	直径14.0 cm 高12.0 cm
作品概要	押型文と呼ばれる彫刻した丸棒による回転押捺文を持つ小型の尖底土器。器壁は厚く、口縁部はやや外反する。押型文は粗大な楕円形で、外面全面と口縁部内面に施される。これらの特徴から、本品は縄文時代早期の押型文土器と考えられる。押型文土器は、この時期の日本列島全域で広域展開する特徴的な土器であり、特に出土が伝えられる地域が属する北部九州では遺跡が集中しており、中心地域の一つであったと思われる。小型ながら完形である点は希少である。		
購入金額	2,000,000 円		



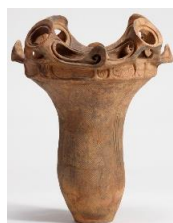
2 名称	深鉢形土器（ふかばちがたどき）	品 質	土製
作者等	伝青森県八戸市是川出土	員 数	1点
時 代	縄文時代・6000年前-5000年前	寸 法 等	口縁部径33.0 cm 底部径16.5 cm 高50.0 cm
作品概要	底部から口縁部に向かって直線的にやや開く円筒形の土器。上面観は楕円形。口縁部に縄文の押圧による大振りな三角文が6単位で施される。頸部以下全面には羽状縄文と呼ばれる矢羽状の縄文が8段ほど施されている。これらの特徴から、本品は縄文時代前期後半の東北北部に分布する円筒下層式土器と考えられる。特に羽状縄文が美しい。		
購入金額	4,968,000 円		



3 名称	深鉢形土器（ふかばちがたどき）	品 質	土製
作者等	伝青森県三戸郡三戸町泉山出土	員 数	1点
時 代	縄文時代・5000年前-4000年前	寸 法 等	口縁部径45.0 cm 括れ部径38.0 cm 底部径20.0 cm 高55.0 cm
作品概要	胴部が口縁部に向かって直線的に弱く開き、頸部付近で屈曲して外反する深鉢形の土器。上面観は楕円形。口縁部から胴部上半2分の1までを隆線を用いて三角形や長方形に区画し、区画内に縄文の押圧によるC字文を連続して施す。これ以下の胴部には結び目のある羽状縄文が7段ほど施されている。これらの特徴から、本品は縄文時代中期の東北北部に分布する円筒上層式土器と考えられる。この時期の日本列島では、新潟の火焰型土器をはじめとする頸部付近が大きく括れ、過剰に装飾された土器が各地で大流行した。本品の器形はその影響を受けたものとみられ、過剰装飾土器の地域性と広がりを考える上で貴重である。		
購入金額	4,428,000 円		



4 名称	深鉢形土器（ふかばちがたどき）	品 質	土製
作者等	伝茨城県下妻市出土	員 数	1点
時 代	縄文時代・5000年前-4000年前	寸 法 等	最大径51.0 cm 括れ部径20.0 cm 底部径12.0 cm 高64.0 cm
作品概要	頸部付近が大きく括れ、口縁部に4つの箱形の大把手とその間に4つの小把手が均等に配された深鉢形土器。大把手は、沈線による縁取りのある円形の窓枠状の透かしを複数持ち、小把手には沈線による渦巻文が見られる。把手の下段には隆線による長方形・正方形区画を1段廻らせる。胴部は縄文を地文とし、沈線による懸垂文がみられる。これらの特徴から、本品は縄文時代中期の東関東に分布する加曾利E式土器と考えられる。この時期の日本列島では新潟の火焰型土器をはじめとする過剰装飾土器が各地で大流行したが、本品はその地域性を考える上で貴重である。		
購入金額	8,856,000 円		



5 名称	深鉢形土器（ふかばちがたどき）	品 質	土製
作者等	伝茨城県行方郡旧潮来町出土	員 数	1点
時 代	縄文時代・5000年前-4000年前	寸 法 等	最大径54.0 cm 括れ部径28.0 cm 底部径17.0 cm 高68.0 cm
作品概要	頸部付近が大きく括れ、口縁部に4つの箱形の大把手が均等に配された深鉢形土器。大把手は、対面する1対は円形の窓枠状の透かしを複数持ち、もう1対は鶏冠状の頂部で土器内面側に横位の逆S字文を持つ。口縁部から頸部にかけて同心円状に広がる沈線文を、胴部には縄文を地文とする沈線による懸垂文がみられる。これらの特徴から、本品は縄文時代中期の栃木県北部を中心に分布する浄法寺タイプの土器と考えられる。このタイプの土器は、東関東の加曾利E式土器が新潟の火焰型土器の影響を受けて成立したと考えられており、両文化圏の交流を物語る。この時期の日本列島では過剰装飾土器が各地で大流行したが、本品はその地域性と交流を考える上で貴重である。		
購入金額	7,000,000 円		



6 名称	鉢形土器（はちがたどき）	品 質	土製
作 者 等	伝茨城県旧真壁郡出土	員 数	1点
時 代	縄文時代・5000年前-4000年前	寸 法 等	口縁部径41.0 cm 括れ部径33.0 cm 胴部径37.0 cm 底部径8.5 cm 高29.0 cm
作品概要	頸部付近が大きく括れ、部分的に赤彩された鉢形土器。頸部には3本の平行沈線を廻らせ、胴部には擦糸文を地文とし、上半に2本の蛇形沈線を、中央に2本の平行沈線を廻らせる。口縁部の内面および外面、頸部および胴部の沈線間には赤彩が施される。これらの特徴から、本品は縄文時代中期の東関東に分布する加曾利E式土器と考えられる。この時期の日本列島では新潟の火焰型土器をはじめとする過剰装飾土器が各地で大流行したが、本品はその地域性や表現手法の多様性を考える上で貴重である。		
購入金額	4,644,000 円		



7 名称	深鉢形土器（ふかばちがたどき）	品 質	土製
作 者 等	静岡県伊豆の国市仲道A遺跡出土	員 数	1点
時 代	縄文時代・5000年前-4000年前	寸 法 等	口縁部径41.0 cm 括れ部径33.0 cm 胴部径37.0 cm 底部径8.5 cm 高29.0 cm
作品概要	キャリパー形と呼ばれる頸部付近が大きく括れる形態の深鉢形土器で、胴部が1対の大きな蛇状の文様で装飾される。口縁部は内湾し、水平口縁で無文。頸部に4本の隆線を廻らせ、その上に4本の蛇形隆線を重ねる。胴部は縦方向の集合沈線を地文とし、隆線による直線、曲線、蛇形線、渦巻を組み合わせ、1対のU字形の蛇状文様を含む懸垂文を大きく描く。これらの特徴から、本品は縄文時代中期後半の山梨県とその周辺に分布する曽利式土器と考えられる。この時期の日本列島では新潟の火焰型土器をはじめとする過剰装飾土器が各地で大流行したが、本品はその地域性を考える上で貴重である。		
購入金額	7,000,000 円		



8 名称	注口土器（ちゆうこうどき）	品 質	土製
作 者 等	伝青森県八戸市是川遺跡出土	員 数	1点
時 代	縄文時代・5000年前-4000年前	寸 法 等	口縁部径7.8 cm 括れ部径10.5 cm 胴部径21.0 cm (注口部及び突起部除く) 底部径5.0 cm 高22.0 cm
作品概要	土瓶型の大型注口土器。丸く膨らんだ胴部に、内傾する口縁部を持つ。黒色磨研による表面仕上げ。縄文部と無文部とを沈線によって区分けする磨消縄文と呼ばれる手法を用い、外面全面に大振りな雲形の文様を施す。縄文は羽状縄文。胴部には注口部と同じ高さの位置に、先端に刻みのある突起を注口部の対面および左右の中央に計3個配す。これらの特徴から、本品は縄文時代後期後半の東北に分布する瘤付土器と考えられる。注口土器は、その形態から水や酒等の液体を用いた儀礼に使用されたと考えられる土器であり、縄文時代の儀礼を考える上で重要である。		
購入金額	4,000,000 円		



9 名称	皿形土器（さらがたどき）	品 質	土製
作 者 等	伝青森県つがる市木造亀ヶ岡出土	員 数	1点
時 代	縄文時代・3000年前-2300年前	寸 法 等	口縁部径26.0 cm 底部径15.5 cm 高4.0 cm
作品概要	口縁部に5単位のリボン状の突起を持つ皿形の土器。突起の間には、9個前後の短沈線が連続する。外面は口縁部に2本、底部との境界に3本の沈線を廻らせ、その間に縄文部と無文部を沈線によって区分けする磨消縄文と呼ばれる手法を用い、6単位で雲形文を施す。内面の立ち上がり部には、縄文のある1条の隆線が廻る。文様は精緻で、器面はよく研磨され光沢を持ち、内外面全面には点々と赤彩の痕跡が残る。これらの特徴から、本品は縄文時代晩期の東北に分布する亀ヶ岡式土器（大洞式土器）と考えられる。亀ヶ岡文化では、多様な形態を持つ精巧な作りの小形土器が多数製作されており、本品はこの文化の特徴をよく示す土器である。		
購入金額	4,017,600 円		



10 名称	広口壺（ひろくちつぼ）	品 質	土製
作 者 等		員 数	1口
時 代	弥生時代・紀元前2世紀	寸 法 等	最大径34.0 cm 高45.0 cm
作品概要	弥生時代中期の近畿地方にみられる典型的な形態の広口壺である。頸部が伸長して大きく朝顔形に開く点の特徴である。この形態の広口壺が使われた時代の近畿地方は、奈良盆地や大阪平野で拠点的な環濠集落が発達し、集落間の物資流通が活発化した。近畿地方の弥生文化の最盛期に該当する。また、甕棺や丹塗で飾られた土器が盛行する九州と好対照を成している。弥生時代の土器や地域文化の多様性を語る上で、欠くことのできない資料である。		
購入金額	2,916,000 円		



11 名称	壺 (つぼ)	品 質	土製
作者等		員 数	1口
時 代	弥生時代・2世紀	寸 法 等	最大径60.0 cm 高53.0 cm
作品概要	弥生時代後期の大型の壺で、凸帯や櫛描による簡素な施文を特徴とする。出土地不詳だが、形態的特徴から東海地方東部の土器と考えられる。西日本では、弥生時代後期以降に土器は無文化、小型化するが、本例はそれとは逆行する。このような大型の壺は、小児や二次葬に用いられることが多く、壺棺であった可能性もある。弥生時代の埋葬法は、中期までは甕棺や木棺など多様な展開をみせ、後期に木棺へと収斂していくが、本例はそのような埋葬法の多様性を示す資料としても貴重である。弥生時代の土器の多様な展開を示す、重要な位置を占める資料である。		
購入金額	4,752,000 円		



12 名称	鞍橋金具 (くらぼねかなぐ)	品 質	鉄地金銅張
作者等		員 数	1背
時 代	古墳時代・6世紀	寸 法 等	前輪：長29.5 cm 高16.5 cm 厚2.8 cm 中央高3.5 cm 後輪：長45.9 cm 高17.2 cm 厚8.2 cm 中央高1.4 cm
作品概要	鞍橋金具は鞍の両面を飾る金属製の装飾である。前輪と後輪だけがあり海金具の無い磯金具のみの型式である。後輪は遺存状態が悪く、磯金具が縁金具より脱落する。前輪には鞍金具が無い。金具を鞍に固定する鉤には頭に金銅板を被せる。本品の型式学的な特徴から6世紀後半に製作された推定される。当時の古墳被葬者が愛好した飾り馬のイメージをうかがい、日本列島内に乗馬の風習が広く普及していたことを示すうえで、欠くことのできないものであると同時に、対外交流を物語る考古資料としても非常に貴重なものである。		
購入金額	2,500,000 円		



13 名称	f字形鏡板付轡 (えふじがたかがみいたつきくつわ)	品 質	鉄地金銅張
作者等		員 数	1点
時 代	古墳時代・6世紀	寸 法 等	左：長18.7 cm 幅7.7 cm 厚3.7 cm 右：長18.8 cm 幅8.9 cm 厚4.2 cm
作品概要	轡を構成するf字形鏡板のみの破片である。銜が失われて分離しているが、同一個体である。引手と銜は鏡板の内側で連結し、銜の端は鏡板の外側に露出する。鉄地の上に飾り板を重ね、鍍金が施される。この型式の鏡板は5世紀後半に登場し、時期が下ると飾り鉤が密に打たれる。馬形埴輪の中にも同種の鏡板を表したものが、古墳時代中～後期に広く普及した装飾馬具である。日本列島における乗馬の風習の広がりや首長層が愛好した馬事文化の具体的なイメージを伝える上で貴重な考古資料である。		
購入金額	2,000,000 円		



14 名称	杏葉 (ぎょうよう)	品 質	鉄地金銅張
作者等		員 数	3点
時 代	古墳時代・6世紀	寸 法 等	楕円形：幅7.8 cm 高7.5 cm 厚1.6 cm 花形：高8.8 cm 幅8.7 cm 厚0.8 cm 鐘形：高10.9 cm 幅7.8 cm 厚1.4 cm 吊舌：長4.5 cm 幅1.7 cm 厚1.5 cm
作品概要	杏葉とは馬の胸や尻に革紐で垂下して飾る金具である。3点あり、楕円形杏葉、花形杏葉、鐘形杏葉である。楕円形杏葉は金銅装だが立間を欠き周縁に沿って密に丸鉤を打つ。花形杏葉は中央に大振りの円、周囲に小さな円を7つ配列する。鐘形杏葉は中央に円を表し十字文を配したモチーフである。いずれも6世紀後半～7世紀に製作されたと推定される。古墳時代から飛鳥時代にかけての工芸意匠の変遷や金工技術の推移を見せる上で欠くことのできない考古資料である。		
購入金額	2,000,000 円		



15 名称	頭椎 (かぶつち)	品質	金銅製
作者等	伝茨城県稲敷市幸田出土	員数	1頭
時代	古墳時代・6世紀	寸法等	1:長10.3 cm 高7.4 cm 奥行3.9 cm 2:長9.9 cm 高7.3 cm 奥行4.7 cm
作品概要	頭椎とは古墳時代後期に登場する倭装大刀を構成する柄頭の装飾で、6世紀後半から7世紀にかけて盛行する。鑄造して成形した後に合わせ目部分が外れたものである。頭椎中央には1つの孔があり、管状の金具を貫通させていたが現在は破損している。鍍金が著しく剥落しており、銅の地金が見える部分が多い。金銅製頭椎の製作技法がよく分かる資料であると同時に展示効果も高い。古墳時代の武器の変化や刀の柄頭の展開を見せるうえで重要なものである。盟主層的位置を占める古墳から出土したとみられ、古墳文化の東方波及を考えるうえで貴重な資料である。		
購入金額	3,000,000 円		



16 名称	楕円形鏡板付轡 (だえんけいかがみいたつきつわ)	品質	鉄製 (引手・銜) および鉄地金銅製 (鏡板)
作者等	伝茨城県稲敷市幸田出土	員数	1点
時代	古墳時代・6世紀	寸法等	左:長21.4 cm 鏡板高9.8 cm 鏡板幅10.1 cm 引手長16.9 cm 右:長21.9 cm 鏡板高10.3 cm 鏡板幅10.4 cm 引手長17.4 cm
作品概要	鉄地金銅張の楕円形鏡板付轡で銜と立間を欠損するが、轡の概形がうかがえる。鏡板は楕円形で斜格子文の透彫りの飾り板を重ねた後にメッキを施す。その後飾り板と地板とを鉄釘で固定する。銜の端環は鏡板の外側に露出し、その部分を方形飾金具で覆う。銜と引手とは鏡板の内側で連結する。型式学的な特徴から6世紀後半に製作されたと推定される。本品は展示効果が高いだけでなく、同地出土と伝えられる雲珠とセット関係にある同一馬装を構成するもので、馬事文化の展開を示すうえで欠かせないものである。		
購入金額	2,500,000 円		



17 名称	頭椎大刀 (かぶつちのたち)	品質	鉄製 (刀身) および金銅製 (金具)
作者等	伝群馬県藤岡市西平井出土	員数	1振
時代	古墳時代・7世紀	寸法等	全長117.0 cm 刀身長97.0 cm 茎長20.0 cm 鞘元幅3.8 cm 鏢幅9.8 cm 柄幅3.7 cm 身幅0.5 cm
作品概要	柄頭から鞘尻まですべて揃った頭椎大刀の全体像がうかがえるものとして貴重である。頭椎は銅鑄造した部品を合わせ鍍金する。柄は刻み目を施した金銅線を巻く。鏢は台形の窓6つを開け周縁は覆輪で加飾する。鏢は金銅製で鞘口は一字。鞘中央には金銅板を巻いて加飾し、貴金具を1つ付ける。頭椎大刀は6世紀後半に登場し7世紀に盛行する倭装大刀である。日本列島に広く普及し超大型の儀仗刀も作られた。本品は古墳時代から飛鳥時代にかけての頭椎大刀の全形が分かる貴重な考古資料であり、展示効果も非常に高い優れた作品である。伝えられる出土地は多くの古墳が知られ、当地域の盟主的位置にある古墳から出土したと推定される。		
購入金額	10,000,000 円		



18 名称	象嵌鉄刀 附 鞘 (ぞうがんでつとう つけたり さや)	品質	鉄製 (刀身) および銀象嵌
作者等	伝群馬県藤岡市西平井出土	員数	1振
時代	古墳時代・5-6世紀	寸法等	全長120.5 cm 刀身長88.6 cm 茎長23.3 cm ふくら幅3.2 cm 闊幅4.5 cm 茎幅2.3 cm 身厚0.7 cm 鞘最大幅7.8 cm
作品概要	銀象嵌文様を有する鉄刀身とその鞘と見られる木片が遺存する。鉄刀は大型過ぎて佩用には適さず、儀仗用である。保存修理が古く、切先が脱落する。象嵌は佩表2ヶ所と佩裏の関の目釘部分に各1ヶ所の計3ヶ所に見られる。刀身中央は切先に向かって左に魚、右にそれをついばむ鳥のような文様である。魚は鱗を表し鳥は尻尾をもった側面観である。関は目釘孔を中心に7個の突起を持つ星形文または双脚輪状文である。鞘木は外面を平滑に仕上げ、内面は刀身を受けるため段状に加工されている。本品は古墳時代中期後半～後期に製作され、銀象嵌を刀身に持つ点で非常に貴重な例である。王権の地方経営を示すものとして展示効果のみならず資料的価値も高い。		
購入金額	10,000,000 円		



19 名称	鉄刀身（てっとうしん）	品 質	鉄製
作者等	伝茨城県土浦市出土	員 数	1振
時 代	古墳時代・6世紀	寸 法 等	全長109.9 cm 刀身長89.3 cm 茎長20.6 cm ふくら幅2.7 cm 関幅4.2 cm 茎端幅1.9 cm 関厚0.9 cm
作品概要	大振りの鉄刀身。刃は錆のため毀れるが切先から茎尻までが遺存する。刃の中ほどと関に近い部分が大きく欠損し、佩表の刀身は研ぎだされ、メタルが確認される。茎は身に比べて長く関と茎尻に近い部分に1孔つづ目釘孔が開けられる。柄は上縁に溝を彫り上から茎を落とし込む型式である。古墳時代の鉄刀の中には極端に長大で儀仗用の例がある。本例も柄は実用刀を踏襲するが物理的に佩用できない。出土が伝えられる付近は多くの古墳が集中することで知られ、本品も当地の盟主的な位置を占める古墳から出土したと推定される。古墳時代の鉄刀の変遷や機能を知る上で貴重な資料である。		
購入金額	2,203,200 円		



20 名称	鉄刀 附 鐔・鍔（てっとう つけたり つば はばき）	品 質	金銅製（金具類）および鉄製（刀身）
作者等	伝茨城県土浦市出土	員 数	1振
時 代	古墳時代・7世紀	寸 法 等	全長88.5 cm 刀身長79.7 cm 茎長8.8 cm ふくら幅2.9 cm 関幅4.6 cm 茎端幅1.4 cm 関厚0.4cm
作品概要	金銅製の方形柄頭金具で飾られ、八窓鐔を持つ装飾付大刀である。柄木には金銅製の方頭金具が付く。この金具は列点による洞文装飾がある。鐔は薄く作られ約1/4を欠損する。鞘と鐔とは合口で組み合い、金銅製鍔金具を嵌める。鍔の切先側に足金物を1点、さらに切先との間に足金物1点を介し、責金具が付けられる。本品のような有窓の金銅製鐔を持つ装飾大刀は6世紀後半に登場し、7世紀には柄頭の形状が多様化する。足金物も腰ではなく体前に垂下させる飛鳥時代の佩刀方式への移行が見られる。これらから本品は7世紀に製作されたと推定される。古墳時代後期の刀の全形がうかがえ、律令時代の刀制へと移り変わる時期に当たる非常に重要な考古資料である。		
購入金額	3,000,000 円		



21 名称	圭頭柄頭付鉄刀（けいとうつかがしらつきてっとう）	品 質	銀製（圭頭金具）および鉄製（刀身）
作者等	伝茨城県土浦市出土	員 数	1振
時 代	古墳時代・7世紀	寸 法 等	全長45.4 cm 刀身40.3 cm 柄5.1 cm 鞘幅2.9 cm 関部厚1.4 cm
作品概要	銀製の圭頭金具で飾られた大刀で切先を失う。圭頭金具は柄から外れ、柄には刻み目を持った銀線を巻く。食み出し鐔で一字に終わる。鞘口金具にも銀板を被せていて、切先側は足金物と一体化する。柄頭、足金物と鞘尻金具は不規則な刻線で加飾されているが、何を表したか判然としない。方頭金具に銀装の柄を持った刀は6世紀末に登場し、7世紀に盛行する。本品は短刀で、副葬品に見られるのは飛鳥～平安時代である。飛鳥時代以降の装飾付大刀の全形がうかがえる資料として貴重であるだけでなく、様式の歴史的な推移を示すものとしても重要である。刻線による施文も類例が少なく注目される。		
購入金額	2,000,000 円		



22 名称	車輪石（しゃりんせき）	品 質	緑色凝灰岩製
作者等	伝奈良県島山古墳出土	員 数	1点
時 代	古墳時代・4世紀	寸 法 等	幅14.9 cm 高15.9 cm 高2.2 cm 孔径6.1 cm
作品概要	南海産のオオツタノハの貝輪を石にうつした腕輪形石製品を車輪石と呼ぶ。全体に大ぶりの作りでていねいに仕上げられている。肋条の一部が剥離しているが完形品である。中央には円孔があり、穿孔時の擦痕もとどめている。裏面もていねいに仕上げられ、側面もていねいに磨かれている。伝えられる出土地は古墳時代前期後半に築造された前方後円墳で、車輪石が多量に貼り付けられて出土した。本品もそれと比較しても型式学的に大きな隔たりはない。九州の弥生時代に展開する南海産貝輪の文化が受け継がれ、倭王権の伸張を物語る考古資料として貴重であるだけでなく、展示効果も高い。		
購入金額	2,000,000 円		



23 名称	横瓶（よこべ）	品 質	土製
作者等		員 数	1口
時 代	古墳時代・6世紀	寸 法 等	口縁部径12.1 cm 胴部長32.0 cm 高22.5 cm
作品概要	丸底の長胴壺を成形後に開口部分に円板を貼り付けて塞ぎ、横長の球形胴部を作り出す。その後、その側面を割り貫き別作りの口頸部を取り付けて横瓶とする。胴部はタタキで成形し、肩部からは自然釉が垂れており美術効果を高めている。横瓶は6世紀に登場する須恵器の器種の一つであり、古墳時代後期の副葬品に多く見られる。また表面に残る痕跡から、窯での焼成の様子をうかがい知ることができる。とくに自然釉は燃焼材に起因する偶発的な要因で発生するものだが、後の灰釉陶器に繋がっていく要素であり、当時の人々が釉調の変化を一種の景色として愛好したことをうかがわせる優品である。		
購入金額	2,268,000 円		



24 名称	有蓋双耳壺（ゆうがいそうじこ）	品質	土製
作者等	伝奈良県桜井市穴師出土	員数	1合
時代	奈良時代・8世紀	寸法等	蓋：口径17.4 cm 器高7.1 cm 身：胴部径30.5 cm 口径14.8 cm 器高23.7 cm
作品概要	<p>肩部に2つの耳が付いた薬壺形の壺に蓋を伴う須恵器の壺である。蓋はヘラ削りでていねいに整形し、中央には2つの凸帯によって3段に区切られた塔形つまみを付ける。蓋内面には判読が難しい墨書が認められる。壺は粘土紐を曲げて耳を対向する2ヶ所に付ける。本品のような器形は仏具であることが多く、火葬や二次葬に伴う骨を納めた蔵骨器や地鎮具などの埋納品であった可能性が高い。『続日本紀』によると日本列島における火葬は7世紀末に導入されたが、考古資料ではその前後から蔵骨器が出土が知られている。伝えられる出土地には群集墳が広く展開しており、本品もその系譜につながる貴重な考古資料である。</p>		
購入金額	5,400,000 円		



25 名称	銅製経筒 附 灰釉陶器外容器・納入品 (どうせいきょうづつ つけたり かいゆうとうきがいようき・のうにゆうひん)	品質	銅製
作者等	伝岐阜県出土	員数	1式
時代	平安時代・11世紀	寸法等	経筒：径11.1 cm 高23.6 cm 同蓋：径11.3 cm 蓋高1.5 cm 方鏡：9.2×9.3 cm 厚0.3 cm 銅環：径7.8 cm 帯幅0.7 cm 外容器：高37.3 cm 口頸部径14.5 cm 胴部最大径34.3 cm 底径18.8 cm
作品概要	<p>銅製の経筒に、外容器である灰釉広口壺などをともなう。経筒は、銅板を円筒状に成型して側面の合わせ部を10個の銅鉸で留め、端部を折り返す。底板は円板をはめ、蓋は銅板を敲いて成形する。全体に簡素な形状である。外容器である灰釉広口壺は淡灰緑色の釉が全体にかかる。経筒を納めるため口縁部を打ち欠いている。納入品として銅製方鏡、銅環、装飾を持つ竹製内容器の残片と見られる有機物がある。本品は岐阜県の経塚から出土したと伝えられ、形状からもこれを否定する材料はない。また、灰釉広口壺は素地や釉調からみて尾北窯（愛知県）の製品と考えられる。内容物も含め、平安時代末の経筒埋納の一端を示す貴重な資料である。</p>		
購入金額	8,000,000 円		



26 名称	加彩鎮墓獸（かさいちんぼじゅう）	品質	加彩陶
作者等		員数	1駆
時代	中国 後漢-西晋時代・3-4世紀	寸法等	長27.7 cm 幅11.2 cm 高28.2 cm
作品概要	<p>虎に似た姿、両肩に生えた翼などから、中国古代における空想上の動物「辟邪」を表したものと推測される。背中和腹に孔が開いている。その孔に棒状のものを挿して貫通させる器座であるとともに、墓室内に副葬されたものであれば、墓へ侵入しようとする邪悪なものを払いのける一種の鎮墓獣としての役割も期待されたであろう。頭頂部の左右に円孔が2個ずつ均等に並ぶ。これらの孔には別作りの角や耳などが挿しこまれていたと考えられる。四肢および腹の角張った粗雑な仕上げは、後漢末から西晋時代にかけての一角の鎮墓獣や牛を象った加彩陶と共通する。本作は当時の鎮墓獣に採用された造形の多様性を示す可能性があり、注目される。</p>		
購入金額	2,354,400 円		



27 名称	漆盤（うるしばん）	品 質	木胎漆塗
作者等		員 数	1口
時 代	中国 前漢-後漢時代・紀元前1世紀-1世紀	寸 法 等	口径24.0 cm 高6.0 cm
作品概要	木胎漆塗りで、器腹の浅い盤である。おもに食べ物を盛る実用の器として使われた。漆盤は遅くとも戦国時代後期(紀元前3世紀)に中国に出現し、秦から前漢時代にかけて普及した。前漢時代には巻雲文を主体とする繁縷な文様の漆器が発達したが、一方で本作のように内面を黒と朱で帯状に塗り分けただけの簡便な装飾の漆器も存在した。本作の外面には「史」の字が手書きされている。これは製作に関わった工人か、持ち主の人名であると考えられる。このように、黒と朱を塗り分けただけの簡便な装飾を施し、人名と思しき字を記した漆盤は楽浪の彩簠冢や王光墓などに出土例を求めることができる。本作は前漢中期から後漢前期にかけて作られた漆盤の典型例として注目される。		
購入金額	3,024,000 円		



28 名称	漆耳杯（うるじはい）	品 質	木胎漆塗
作者等		員 数	1口
時 代	中国 秦-前漢時代・紀元前3世紀-紀元前2世紀	寸 法 等	長22.6 cm 幅17.0 cm 高6.5 cm
作品概要	平面が楕円形の木胎漆器で、長手の両側に把手が内傾してつく。俯瞰すると把手がひとつの顔の両耳に見えることから、「耳杯」と呼ばれる。全体に黒漆を塗り地となし、朱漆と褐色に近い朱漆で四葉文・V字文・列点文などを描く。耳杯は羹や酒を盛る容器として戦国時代(紀元前5-前3世紀)に登場し、秦漢時代(前3-2世紀)に盛んに作られた。青銅器、銀器、玉器、ガラス器、陶器(副葬用の明器)などでも作られたが、本来は漆器で実用に供された。本作のように把手の輪郭が弧状を呈し、内外の口縁部をV字文と点で飾る耳杯は湖北省雲夢などの秦漢墓から多数出土している。秦から前漢時代の前期(紀元前3-前2世紀)にかけて製作された耳杯の典型例として位置づけられる。		
購入金額	3,585,600 円		



29 名称	青磁神亭壺（せいじしんていこ）	品 質	青磁
作者等	中国・古越州窯 推定中国浙江省もしくは江蘇省出土	員 数	1合
時 代	中国 西晋時代・3世紀後半	寸 法 等	通高47.3 cm 身：最大径27.0 cm 高38.9 cm 蓋：10.3×10.3 cm 高9.7 cm
作品概要	胎土は灰色で、表面のほぼ全体に青磁釉が施される。平底の壺で、胴部と頸部とのあいだを突帯で隔す。胴部には人物像（あるいは仙人像）と蹻る龍の姿を俯瞰した姿の装飾を貼花で交互に配する。頸部より上は3層の大型建築物を象り、おもに楽器を演奏する人物像を飾る。第2層の屋根より上は蓋のように取り外し可能である。浙江省と江蘇省南部では、三国時代から東晋時代にかけて頸部より上に4口の壺や大型建築物を立体表現で飾った特殊な壺が流行した。この種の壺は死後も安寧に暮らすことのできる仙界へと墓主を導く装置として、あるいは、葬送儀礼に際して魂が宿る依代としての役割を果たしたものと考えられている。「神亭壺」という通称は、その所以である。		
購入金額	6,976,800 円		



30 名称	ローマンガラス器 (ろーまんがらすき)	品 質	ガラス
作者等	東地中海地方	員 数	31口
時 代	ローマ時代・1-2世紀	寸 法 等	1:最大幅5.9 cm 高9.5 cm 2:口径7.5 cm 底径3.5 cm 高3.5 cm 3:最大幅8.5 cm 口径2.0 cm 底幅5.0 cm 高9.5 cm 4:口径4.0 cm 最大幅6.5 cm 高10.0 cm 5:口径4.0 cm 胴径4.0 cm 底径3.4 cm 高10.5 cm 6:口径1.3 cm 胴径5.0 cm 底径3.3 cm 高12.5 cm 7:口径1.7 cm 胴径4.0 cm 底径3.0 cm 高11.0 cm 8:口径1.7 cm 胴径4.0 cm 底径3.0 cm 高11.0 cm 9:口径4.5 cm 胴径8.0 cm 底径4.0 cm 高8.8cm 10:口径2.3 cm 胴部6.0 cm 底部3.5 cm 高10.0 cm 11:口径5.0 cm 胴径7.3 cm 底径4.0cm 高8.0cm 12:口径2.0 cm 胴径7.0 cm 底径4.0 cm 高8.5 cm 13:口径6.5 cm 胴径7.5 cm 底径4.5 cm 高7.7 cm 14:口径11.3 cm 底径5.0 cm 高4.3 cm 15:口径7.0 cm 底径3.5 cm 高5.8 cm 16:口径4.0 cm 胴径5.0 cm 底径3.5 cm 高5.8 cm 17:口径1.5 cm 胴径5.0 cm 底径3.0 cm 高5.7 cm 18:口径4.2 cm 底径2.8 cm 高6.8 cm 19:口幅3.0 cm 最大幅4. cm 2 胴径3.0 cm 底径2.5 cm 高5.0 cm 20:最大幅6.0 cm 胴径5.7 cm 底径2.5 cm 高8.0 cm 21:口径3.5 cm 胴径6.0 cm 底径4.0 cm 高6.0 cm 22:口径5.2 cm 胴径5.2 cm 底径3.0 cm 高6.2 cm 23:口径3.5 cm 最大幅6.0 cm 底径3.3 cm 高9.0 cm 24:口径3.0 cm 最大幅5.0 cm 底径3.3 cm 高8.5 cm 25:口径1.5 cm 胴径7.0 cm 底径4.0 cm 高8.5 cm 26:口径2.5 cm 胴径8.0 cm 底径3.0 cm 高10.0 cm 27:口径2.5 cm 胴径7.0 cm 底径4.5 cm 高9.0 cm 28:口径3.0 cm 胴径7.0 cm 底径3.5 cm 高7.0 cm 29:口径4.5 cm 胴径5.0 cm 底径3.5 cm 高13.0 cm 30:口径5.0 cm 胴径6.5 cm 底径2.5 cm 高16.0 cm 31:口径4.0 cm 胴径4.3 cm 底径3.0 cm 高12.0 cm
作品概要	1 両手付二連瓶、2ガラス碗、3両手付扁壺、4取手付ガラス瓶、5吹きガラス瓶、6吹きガラス瓶、7長頸吹きガラス瓶、8長頸吹きガラス瓶、9広口吹きガラス瓶、10撒水ガラス瓶、11紐文装飾ガラス瓶、12吹きガラス瓶、13吹きガラス瓶、14ガラス碗、15吹きガラス碗、16吹きガラス瓶、17貼付紐文ガラス瓶、18吹きガラスコップ、19取手付吹きガラス瓶、20凹み装飾取手付吹きガラス瓶、21吹きガラス瓶、22凹み装飾吹きガラス瓶、23両手付吹きガラス瓶、24両手付紐文装飾吹きガラス瓶、25紐装飾付吹きガラス瓶、26吹きガラス瓶、27突起装飾吹きガラス瓶、28両手付吹きガラス瓶、29吹きガラス瓶、30吹きガラス瓶、31吹きガラス瓶 紀元前50年頃、シリア・パレスティナ地域で発明されたという吹きガラス技法により制作されたローマ時代のガラス容器31点。用途としては、瓶、碗、コップなどがあり、紐文装飾、取っ手などの装飾や、長頸、広口などの違いが見られる。また宙吹きによる成形だけでなく、文様を彫り込んだ型に溶けたガラスを吹き込むか宙吹きにより型の凹凸を表面に写すて成形と装飾を同時に行っている。31点は6箱に収納されているが、収納箱の作り方や収納用仕込みの仕上げが同じため、一括資料として取り扱う。31点は、すべて発掘品と考えられ、土中の条件によって、表面の銀化の程度に差がある。		
購入金額	4,650,000 円		

上段 左端から (1~12)、中段 左端から (13~22)、下段 左端から (23~31)



31 名称	ミナイ手人物文鉢 (みないでじんぶつもんはち)	品 質	陶器
作者等	イラン・ラージェス	員 数	1口
時 代	セルジューク朝時代・12世紀	寸 法 等	径19.5 cm 高台径8.3 cm 高9.0 cm
作品概要	紅褐色の胎土を用いた、底面から大きく広がる鉢。底面及び高台を除く全面に少し厚手に白釉を施し、内面には金、赤、緑、黒、青など鮮やかな色絵具でさまざまな文様を描いている。外面は無文。さまざまな色絵具で絵を描き、低火度還元焔で焼成する技法をミナイ手（ペルシア語でエナメル、色絵を意味する）と呼び、セルジューク朝時代を代表する上絵付け技法にあたる。描かれている内容は、口縁内側で繰り返される倣文字文を含む長方形文様、見込み中央の向かい合い談笑する坐った人物2人、内側側面には向かい合う人頭有翼の動物3組である。		
購入金額	1,684,800 円		



32 名称	大珠（たいしゅ）	品質	翡翠製
作者等	伝茨城県常陸大宮市下村田坪井出土	員数	1点
時代	縄文時代・5000年前-4000年前	寸法等	縦5.5 cm 横3.0 cm 厚1.6 cm 重量38.9g
作品概要	新潟県系魚川産と推定される翡翠製。石質は、淡緑色で透明度の高い良質なものである。半月形の扁平な自然礫を素材に、大きく形状を変えることなく研磨して成形されている。上半部に両面からの穿孔が1箇所みられる。縄文時代後半期の日本列島では、緑色石材を用いた様々な垂飾が流行した。本品は、縄文時代中期の東日本で流行した大珠と呼ばれる鯉節形の翡翠製垂飾の一類型であり、大珠の形態的多様性を知る上で貴重である。		
購入金額	2,354,400 円		



33 名称	管玉（くだたま）	品質	翡翠製
作者等	伝茨城県かすみがうら市安食平出土	員数	1点
時代	縄文時代・4000年前-3000年前	寸法等	直径2.2 cm 長4.3 cm 重量32.0g
作品概要	新潟県系魚川産と推定される翡翠製。石質は、乳白色部分と濃緑色部分が入り混じる、透明度の高い非常に良質なものである。ずんぐりとした円柱形に成形され、器体長軸方向に一方から太めの穿孔がなされている。縄文時代後半期の日本列島では、緑色石材を用いた様々な垂飾が流行した。本品は、縄文時代中期の東日本で流行した大珠と呼ばれる鯉節形の翡翠製垂飾の一類型で縄文時代後期に発達する形態であり、大珠の形態的多様性を知る上で貴重である。		
購入金額	2,000,000 円		



34 名称	御物石器（ぎよぶつせっき）	品質	結晶片岩製
作者等	岐阜県・石川県・富山県出土	員数	1点
時代	縄文時代・4000年前-2300年前	寸法等	縦33.0 cm 横5.8 cm 高9.5 cm
作品概要	石製呪術具。全面に黄褐色の粘土が薄く付着する。平面形は略長方形で、長側面の1箇所に鞍状の抉りを持つ。両面は敲打仕上げで、幅広の凹線で縁辺や端部を縁取るような文様が施されている。出土地は不明ながら、御物石器は一般的に岐阜県・石川県・富山県に濃密に分布し、他の地域ではほとんど出土しない地域性の強い石製品である。縄文時代後晩期には、東日本で生まれた土偶や石棒などの呪術具が西日本へと伝わるが、御物石器はそれらとは好対照をなす。本品は、縄文時代の呪術具の地域性とその伝播を考える上で重要である。		
購入金額	4,752,000 円		



<歴史資料> (1件)

1 名称	島津氏関係文書（しまづしかんけいもんじょ）	品質	紙本墨書
作者等		員数	1帖
時代	室町時代-江戸時代・15世紀-19世紀	寸法等	縦38.8 cm 横29.2 cm 厚3.2 cm
作品概要	薩摩島津氏とその家臣に関係する室町時代から江戸時代にかけての古文書38通を貼り込んだ手鑑。概ね安土桃山時代から江戸時代初頭にかけての書状類からなる。このうち(1)元龜2年～天正8年(1571-81)の島津義久書状は、自身の菩提寺である妙谷寺住職の体調を案じたもの。(38)は寛永11年(1634)に琉球王国から江戸幕府に派遣された使節に関する書状。1633年(清：天聰7年、日本：寛永10年)、中国の清朝より冊封を受けた琉球王尚豊は、その翌年、薩摩藩主島津家久へ謝恩使節を鹿児島に派遣した。薩摩藩はこの使節を京都に向かわせ、江戸幕府將軍徳川家光に二条城で謁見させた。この経緯については後世の編纂資料に詳しいが、本書状は関係する一次史料の原文書として貴重である。		
購入金額	1,800,000 円		

